

## 巻 頭 言

「耳マークをつけてみませんか」

宇田川 芳江

都庁第1庁舎の受付、コンビニのレジ、銀行やスーパーの入口、公共施設や病院のカウンター、靴屋さん、こんなところにも! と驚くほど、耳マーク表示を目にすることが増えた。表示がされているのは、表示を判断した人や会社や施設の考え方が背景にあるわけで、お願いしても断られることも多かった昔を思うと、世の中が確実に変わってきていることを実感する。以前とは比べものにならないくらい嬉しいことである。コンビニのレジには耳マークとともに、レジ袋・お箸・スプーンの要否などを指差して示せるシールが貼られているが、店員が耳マークの意味を理解していないと、シールの上にお金を入れるお皿がドンと乗っていたりする。コンビニや銀行などが耳マークを設置するのは、ここに聞こえない人が来たら、筆談などわかりやすい方法で対応しますという宣誓なのだけど。

耳マークは名古屋の難聴者で高木四良(たかぎしろう)さんが発案し、トヨタ自販のデザイナーをされていた星野善晃さんが作成されたものと聞く。難聴者が、残された聴力を生かし、一生懸命聞こうとするデザインになっているそうだ。来年は発案されてから 50 周年になる。内閣府の「障害者白書」には、障害者に関するマークとして掲載されている。現在著作権は全難聴が持っていて、加盟協会以外が耳マークを使用する際には、全難聴に申請が必要になっている。全難聴には耳マーク部があり、耳マークグッズ作成、耳マーク PR のポスターの公募、ミーミちゃん、メーメちゃんのご当地スタンプ作成など、活発に普及運動を繰り広げている。愛知県難聴・中途失聴者協会理事長の黒田和子さんが部長として頑張っておられる。

東京中難協では、全難聴作成の耳マークグッズに加えて、のびパス、キーホルダーなど自家製の耳マークグッズを販売している。しかし、聞こえない人自身が耳マークのバッジをつけたり、グッズを身に着けているのを目にすることは残念ながらまだまだ少ない。難聴者が耳マークを身に着けるのは、自分が聞こえないことを表すことになり、隠したい心理はなかなか消えない。私も、恥ずかしくて耳マークバッジをつけられない時期が長かった。

先日、フライドチキンのお店で、「耳が不自由です」と書いてある耳マークののびパスを見せたら、店員がすぐ、あごの下までマスクをずらして、メニューを指差しながら丁寧に対応してくれた。胸がいっぱいになり涙が出そうになった。ファーストフードの店の多くは、やり取りが1回で終わらないことが多い。後ろに並ぶ人を気にしながら、店員ととんちんかんやり取りをしてしまった失敗があるだけに、今回の対応は本当に嬉しかった。黒田さんからは「のびパスは水戸黄門のご印籠のような効果がありますよ」と言っていた。他県の購入者からも同様の声を聞く。耳が聞こえないことは私たちのすべてではなく、耳の機能の問題。隠さないで堂々としていたい。耳マークをつけてみませんか。